大雪で33時間 立ち往生も 燃料不安なく

プリウスLPG車の災対力立証

ケイテック結城取締役

新潟・群馬県境付近の関越自動車道で昨年12月16～19日、大雪のため最大2千台以上の車が立ち往生した。ケイテック（本社・酒田市、小松豊社長）の結城一俊取締役営業部長はこれに巻き込まれ、プリウスのLPGバイフューエル車の中で33時間過ごした。「燃料タンクが二つあるため、燃料切れリスクが少ない点で安心だった。LPGバイフューエル車は大雪による〝災害〟にも強かった」

結城氏は17日、仕事で酒田市から埼玉に向かっていた。午前9時ごろ新潟県南魚沼市の関越道上り線を走っていて、大和PAと六日町ICの間で渋滞する車の最後尾に着けた。雪は路面に数センチほどしか積もっておらず、初めは事故で渋滞していると思ったという。車載テレビの昼のニュースで、自分が雪で立ち往生していることを知った。

立ち往生中、最も不安なのは燃料切れと排気ガスが車内に流れ込むことによるCO中毒だ。LPガスは満タン、ガソリンタンクは半分ほどで出発し、動けなくなった時点でLPガスは約3分の2、ガソリンはそのまま残っていた。

「起きている間はマフラーや車の周りの雪を取り除いて車内に排気ガスが充満しないようにできるが、眠っている間に雪が積もりマフラーを塞いだら、という

関越道の立ち往生現場（12月18日午後、結城氏撮影）

のが怖かった。しかしLPガスでエンジンを動かしていれば、排気ガス中のCOは10分の1であることを知っていたので、危険はあるものの冷静に対処できた」。

プリウスの排ガスに含まれるCOは1・15㌘／㌔㍍だが、同社LPGバイフューエルのプリウスは0・16㌘／㌔㍍だ。

その日の夜、自衛隊が立ち往生した車の燃料の残りを確認しながら、少ない車に携行缶で5㍑ずつ燃料を補給していった。結城氏もガソリンを補給してもらった。「翌日もいつ抜けられるか分からず、今夜もこのままかもしれないと考え、夜間に備えLPガスを使えるように日中起きている間はガソリンエンジンをかけた」。結局解放されたのはその日の夕方6時だった。

2013年に北海道で起きた立ち往生ではCO中毒や凍死で8人が亡くなった。その後16年に新潟県、17年に鳥取県、18年福井県で大規模な立ち往生が発生している。「大雪による立ち往生も、これだけ頻発すると地震や台風と同じような災害と言っていい。今回も新潟県は自衛隊に災害派遣要請した。LPG車は東日本大震災以降、災害時に強い車と認識されるようになったが、大雪による災害にも強いことが今回の経験で分かった」